



ありあけ

佐賀大学農学部
同窓会報
No.14

発行日 2014年7月1日
編集 会報編集委員会

発行 佐賀大学農学部同窓会
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700
E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp
ホームページ <http://dousou.saga-u.ac.jp/>

巻頭言



同窓会組織の在り方

農学部同窓会長（S44年卒・土改） 川 副 操

会員の皆様方には益々ご清祥の事とお喜び申し上げます。

私、先日の第29回総会において金丸会長の後任に選定いただきました。何分の重責に恐縮しておりますが、精一杯努めたいと思いますので皆様方のご指導ご鞭撻またご協力の程をよろしくお願ひします。

これまでどちらかというあまり協力的でなく、相談事が生じたときのみ頼っていた感がある同窓会に、この2年間金丸会長の下でお手伝いをさせて頂きましたが、その活動の難しさを痛感しているところです。

農学部は昭和30年、当時の文理学部から分離創設されたものですが、爾来早や60年になろうとしており、今日では約7,000名の卒業生を擁し、それぞれ各分野・各方面でご活躍される一大勢力となっています。同窓会は、この同窓の皆様方のお力を結集して会員相互の親睦を深めると共に、在学生の方々へ情報の発信・心のアドバイザー的存在となり、ひいては母校農学部の発展に寄与できればとの思いを持って各種の活動を事業計画として行っております。

しかしながら昨今のわが国社会は、いつの間にか自我意識の高まりが強くなり、個々の権利を尊重するあまりから、組織・集団とのつながりを敬遠するいわゆる連帯意識が欠如した無縁社会化が進んできた感がありましたが、先の3・11東日本大震災で「絆づくり」の大切さが論じられてから若干変化したように思います。ぜひこの風潮を同窓会組織運営にも反映させたいものです。

先日農学部の渡辺学部長と話す機会がありました。私たち同窓会へお願いがあるとのこと。それは「在学生との絆を深める」こと。在学生に対して人生の先輩として身近に感じ、人生の目標たり得る人の集団として同窓会を位置付けてほしい。まさにこれからの同窓会組織の在り方を示されたのだと思います。

最後に、昨年末わが母校に「美術館」が誕生しました。国立大学では2校目のようで、地域と大学を結びつける施設として期待されています。佐賀大学は飛躍しています。我々同窓会も進歩したいものです。県外でご活躍の皆様方にもぜひ訪れてもらいたいものです。

これから微力ではありますが、同窓会の発展へ向けて頑張りたいと思いますのでよろしくお願いいたします。



佐賀大学同窓会館

平成26年度 総会・講演会・アトラクション・懇親会の報告

第29回（平成26年度）同窓会総会等を開催

佐賀大学農学部同窓会では、平成26年5月17日（土）に農学部大講義室で、第29回総会を開催し、平成25年度の事業実績・決算、平成26年度の事業計画・予算、役員改選についての審議を行いました。

出席者については96名と例年よりやや多く、筑後支部の大村支部長様や、昭和37年卒業の燦々会の12名の皆様などをはじめ、県内各支部を中心にたくさんの皆様の出席をいただきました。

総会後は、企画工房REPRO代表大草秀幸氏による講演「今、時事を語る」を聴講させていただきました。大草先生は、新聞社の要職や行政のトップの立場で得られた幅広い経験や見識をとおして、現在私たちが直面している憲法改正、集团的自衛権についてどう考えるべきかについて貴重なご意見をお聞かせいただきました。戦後70年が経とうとしているが、終戦時に、戦争の直接の被害や栄養衛生面などの環境悪化等で、男子の平均寿命が約24歳、女子は約31歳となっていたことや、戦地に行き戦死された兵隊の約1/3は餓死であったことなど戦争は大変悲惨であることと、占領軍の強い指導のもと制定されたとはいうものの、現憲法は国民の権利を守り民主的な社会をかたち作ってきたことや、日本は真に平和的な国家に生まれ変わって戦後は、軍事的には一人も人を殺さない数少ない国になっていることなどを考えると、憲法改正、集团的自衛権の確立については、より慎重かつ丁寧な議論を重ねる必要があるというお話をいただきました。

私たちも、身近な問題として賛否を急ぐというより、国民一人ひとりが将来の日本国のあるべき姿をじっくり考えることが必要であることを改めて、思

い直したところです。

講演会の後は、リラックスした雰囲気、昭和49年卒業落楽亭粋夢さんと山口俊治様の「小噺アラカルト」を楽しみました。山口様は、大学在学時の趣味の落語から、本格的に稽古を積まれ、県庁をご退職後は老人ホームや地域の集会、各種団体の研修会等で落語・小噺を演じておられるとのことで、当日も会場を大いに沸かせていただきました。

その後は、会場を生協の「かささぎホール」に移して、懇親会で大いに盛り上がりました。今年度は、講演会以降のプログラムから佐賀大学佛淵学長様、農学部渡邊学部長様ほか多数の学校関係者にご参加いただいたほか、農学部の学生約30名にも参加いただき、在校生・教職員・卒業生の交流の場としての楽しいイベントにすることができました。

総会は、私たち同窓会の1年の活動方針などを決める重要な場であるとともに、関係者の絆を深める場でもあります。総会にあまり参加いただいてない同窓生の皆様も、来年は、ぜひ総会へのご出席を期待しておりますので、よろしくお願いたします。

（S59年卒・育種・松永 章）



金丸会長の挨拶



26年度総会（農学部大講義室）



講演 大草秀幸 氏



落語 落楽亭酔夢 (山口俊治氏)



懇親会「かささぎホール」



懇親会「かささぎホール」

役員改選

会長 川副操[S44]、**副会長** 大坪正幸[S59]、白武義治[S51]、**理事長** 重富修[S59]、**理事(編集)** 大久保惇[S47]、**理事** 有馬進[S52]、光富勝[S51]、吉賀豊司[H2]、田中宗浩[H4]、郡山益実[H7]、宮本英揮[H10]、外尾弘文[H2]、荒木勉[S62]、中村典義[H8]、中原典嗣[H2]、石橋誠[H1]、福田喜隆[S63]、水田和彦[S51]、内海修一[S49]、**監事** 森田昭[S52]、松永章[S59]

支部長 溝口善紀[県庁支部/S53]、荒木清史[教職支部/S54]、内田信浩[農協連支部/S63]、山田和由[農業自者の会/S49]、大久保清海[県支部/S41]、高松孝行[熊本県支部/S52]

平成25年度 在学生支援活動

佐賀大学全学生を対象とする在学生支援活動として、大学と各学部同窓会の共催による「キャリアデザイン講座」が開催されています。

農学部同窓会からは平成25年11月25日に徳渕菜央(H13年卒・応用生物科学科、現在は日本農薬(株)勤務)氏が担当されました。

また、農学部3年生を対象に「就職ガイダンス」も毎年開催されています。

今年度は平成25年11月27日、12月18日に開催され、同窓生の次の方々が講師として在学生に就職に向けてのアドバイスをされました(敬称は略)。

向井賢吾(H21年卒・応用生物科学科・山崎製パン(株))、木原理沙(H25年卒・生命機能科学科・山崎製パン(株))、山田修平(H12年卒・応用生物科学科・佐賀県伊万里農林事務所)、岩崎雄飛(H17年卒・生物生産学科・佐賀県西松浦農業改良普及センター)、山崎美里(H25年卒・応用生物科学科・中原採種場(株))、中島皓子(H21年卒・応用生物学科・宮島醤油(株))、徳永智子(H15年卒・生物生産学科・熊本県八代地域振興局)、小池良美(S56年卒・農学科・J A佐賀中央会)、高寄智美(H23年卒・生命機能科学科・J A佐賀中央会)

平成25年度事業報告及び収支決算

■事業報告

次の事業を実施し円滑な同窓会活動に努めました。

- (1) 支部未加入者の既存支部加入、新支部設立への働きかけ等の取組。(神埼・鳥栖三養基地区で意見交換など)
- (2) 大学と同窓会との意見交換会の開催。
- (3) 会報「ありあけ」12、13号を発行・配付。
- (4) 大学主催のキャリアデザイン講座や就職ガイダンス、農業版MOT講座等の支援。
- (5) 農学部・全学同窓会支部への支援活動。
- (6) 同窓会会員名簿の整理、会員へのデータ提供。

■収支決算

- (1) 一般会計 (H25.4.1～H26.3.31) 単位：円

【収入の部】

科 目	25年度実績
前年度繰越金	834,455
会 費	3,651,000
学生(新入生)	3,366,000
一般会員	285,000
雑 収 入	126,258
特別会計戻入	0
計	4,611,713

【支出の部】

科 目	25年度実績
事 務 費	692,722
会 議 費	634,856
事 業 費	844,507
組 織 強 化 費	242,647
全学同窓会負担金	1,683,000
特別会計への繰出金	151,500
新入生入会金	76,500
会費平準化準備金	75,000
予 備 費	0
計	4,249,232

【差引残】

(収入)4,611,713円 - (支出)4,249,232円 =
362,481円 (次年度繰越金)

- (2) 特別会計 (H25.4.1～H26.3.31) 単位：円

【収入の部】

科 目	25年度実績
前年度繰越金	16,217,312
一 般 分 a	9,342,795
会費平準化準備金 b	6,874,517
入 会 金 c	76,500
会費平準化準備金 d	75,000
雑 収 入 e	2,148
計	16,370,960
一般分(a+c+e)	9,421,443
会費平準化準備金(b+d)	6,949,517

【支出の部】

科 目	25年度実績
繰出し金	2,000,000

※佐賀大学美術館事業へ寄付(H26.9.4 理事会で専決処理)
[H25→26繰越額] 14,370,960円

平成26年度事業計画及び収支予算

■事業計画

同窓会活動の活性化を図るため、会報の発行による情報提供や、意見交換会の開催など大学と連携した取組みを行います。

- (1) 会報「ありあけ」(14号、15号)の発行・配付。
- (2) 支部未加入者の組織化に向けての取組。(神埼地区・鳥栖三養基地区での交流会など)
- (3) 大学と同窓会との意見交換会の開催。
- (4) 大学職員・学生・卒業生の交流の場の検討・実施。
- (5) 準会員である学生への支援。
- (6) 大学主催のキャリアデザイン講座や就職ガイダンス、農業版MOT講座等の支援。

■収支予算

- (1) 一般会計 (H26.4.1～H27.3.31) 単位：円

【収入の部】

科 目	26年度予算
前年度繰越金	362,481
会 費	4,796,000
学生(新入生)	3,696,000
一般会員	1,100,000
雑 収 入	199,519
特別会計戻入	500,000
計	5,858,000

【支出の部】

科 目	26年度予算
事 務 費	800,000
会 議 費	640,000
事 業 費	950,000
組 織 強 化 費	541,000
全学同窓会負担金	1,848,000
特別会計への繰出金	684,000
学生入会金	84,000
会費平準化準備金	600,000
予 備 費	395,000
計	5,858,000

- (2) 特別会計 (H26.4.1～H27.3.31) 単位：円

【収入の部】

科 目	26年度予算
前年度繰越金	14,370,960
一 般 分 a	7,420,069
会費平準化準備金 b	6,950,891
入 会 金 c	84,000
会費平準化準備金 d	600,000
雑 収 入 e	2,000
計	15,056,960
一般分(a+c+e)	7,506,069
会費平準化準備金(b+d)	7,550,891

【支出の部】

科 目	26年度予算
繰出し金	500,000

※H26年度一般会計へ繰入

[H26→27繰越見込額] 14,556,960円

同窓会組織強化の取組について

佐賀大学農学部同窓会では、平成24年度から継続的に力を入れて、同窓会の組織強化に取り組んでいるところです。

まず、理事会などの中で、同窓会がより活性化するような方法について検討をしたり、アンケートに取り組んだりして、次のような背景に気がついたところです。

現在、県内に在住されている佐賀大学農学部の卒業生は、780名ほどになりますが、県内の同窓会の支部は5支部（佐賀県支部、教職員支部、農協連支部、自営業者の会、県庁支部）で、支部加入者は460名ほどです。総数から支部加入者を差し引いた320名ほどが、身近に支部がないため、同窓会活動に参加したり、興味をもたれるきっかけが少ないようです。そのようなことからどうしても総会をはじめ各種行事については、5支部に所属し、いつも参加しているメンバーが中心となるため、なかなか行事の新鮮味が薄かったり、事業開催の企画についても違った角度からの提案が出てこない。そこで既存の支部に属されていない方にも同窓会に関心を持ち、活動に参加して頂く場が必要であるということになりました。

それを受けて、どのような方法で、きっかけづくり、雰囲気づくりを進めようかということになりましたが、まず効果的なのは、同じ市郡等に住んでいて比較的身近にいるけれども、卒業後は接点がなく、あらためて会う機会がない同じ地域の仲間の絆づくりをやってはどうかということになりました。

まず、どこかモデル地区を先行してみようということで、旧神埼郡エリア（現神崎市、吉野ヶ里町、佐賀市三瀬村）を対象として、1月26日に神崎中央公民館で農学部同窓会本部と神埼地区卒業生の意見交換会を開催しました。

神埼地区95名のうち15名ほどのご出席をいただき今後の方針を話し合いましたが、一気に支部を作るというよりも、既存の支部に属している会員も含めて、毎年1～2回の懇親会を開催できるような人間関係を作っていくことが、取り組みやすく、長い目で見たら効果もでるのではないかという意見が多く



出されました。名前は知っているが、卒業後ずっと会っていない仲間も多い、そのような仲間と定期的につながっていくことで、仕事の面や趣味のことや子供の学校関係でのつながりなどを持てれば、多方面に豊かな絆ができるのではないかということになりました。すぐに、自営業や市町役所、企業にお勤めの皆さんに支部を作っていただくというより、地域の同窓生の雰囲気盛り上がる中で、おいおい「自分たちもまとまって支部を作ってみようか」というムードをつくれればよいのではないかという意見も出ました。

このような、段階を踏まえて4月26日に吉野ヶ里温泉で、記念すべき第1回の交流会の開催となりました。出席者は意見交換会を上回る二十数名となり、S39年卒の田中欽二先輩が取り組んでおられる自然農法に関するお話を聞いたり、互いの近況報告をしたりで、大変盛り上がりしました。

また、この交流会が継続的に開催できるよう、初代の世話人代表者や、庶務・会計担当なども選出されたところです。

まだまだ、緒についたばかりではありますが、神埼地区に続き、鳥栖・三養基地区でも今後の展開を検討しておりますし、更に県内各ブロックにこの流れを広げていきたいと考えているところですので、皆様のお近くで意見交換会・交流会の開催の際には、ぜひご参加くださいますようよろしくお願いいたします。

理事長 松永 章（S59年卒・育種）

恩師からのメッセージ

平成26年3月に佐賀大学を退職された野瀬昭博先生、尾野喜孝先生から卒業生、在校生へのメッセージを賜りました。



沖縄20年、佐賀20年

野瀬 昭博

私にとって佐賀大学農学部は、琉球大学の20年で培った熱帯農業研究では入り込めない場であるというのが、正直な理解だった。通産省・委託調査でのコスタリカのInBioとパナマのスミソニアン・熱帯雨林研究所からの帰途で立ち寄ったコーネル大学・Chua研究室を訪問中のニューヨークのホテルで、深夜1時頃だったろうか、佐賀大へのお誘いの電話を受けた。その後の思案の末に行き着いた覚悟は、20年の沖縄で頂いた熱帯農業研究の面白さ、大げさに言えば「学問」に専念し、非難の的になろうが、「象牙の塔」として沖縄の20年とは反対に、社会とは無縁に、沖縄で見つけた課題に専念して残りの20年を過ごそうというものだった。転任直後の異業種交流会でも「熱帯農業を専門としてまして、佐賀の農業には役にたちません」等と生意気な発言をさせていただいた。

田中典幸先生が「佐賀大農学部は全国で一番小さい学部だが、学会賞の取得者割合は日本一（小さいが侮るなよ）」と諭された意味がよく理解できた20

年でもあった。科研費の取得率も佐大では一番高い学部でアクティブな教員により構成され、運営面では私の知る大学の中では最もフェアであるというのが、私の佐賀大農学部20年の評価である。自らを顧みれば、中途半端ながらもCAM型光合成、紋枯病抵抗性、マングローブと楽しく有意義に取り組むことができた。これも佐賀大農学部の環境あつての結果であつたと感謝している。

門外漢を承知の上であるが、バラフ事業の中で近代資本主義とは何かということを考えさせられた。M.ウェーバは近代資本主義の核心はプロテスタンティズムにあることを論証し、司馬遼太郎は日本の近代資本主義の成功は武士道とプロテスタンティズムの類似性にあると指摘する。「武士道とは死ぬことと見つけたり」という葉隠の武士道は、ウェーバや司馬の言う武士道とは異質のものなのか？佐賀大学のアイデンティティへの応用も含めて、残された時間に検証してみたいと思っている。



退職の挨拶

アグリ創生教育研究センター 尾野 喜孝

農学部同窓会の皆様、その中でも特に、農場、資源循環フィールド科学教育研究センターそしてアグリ創生教育研究センターを卒業された方々に、退職の挨拶をします。私は平成12年に九州大学から佐賀大学に赴任してきましたので、ここでの在職期間は14年を数えました。農学部同窓会とは赴任した平成12年から関わってきたことになるのですが、これまで同窓会のことは卒業式の時以外ではほとんど意識したことがなかったことに気づき、若干の罪悪感が生じてきました。しかしながら、今回は挨拶文を書くように依頼されましたので、ここでは私の14年間の職場での体験を振り返って、記憶として浮かんで

くることなどを綴ってみます。その中に、卒業生の方々の思い出と共感できるものがあれば幸いです。

実習教育は、教員にとって非常に重要な業務活動ですが、大学によってその担当形態は異なるようです。前の大学では、教員と技術職員は自分の専門に係る実習だけを担当すればよかったのですが、佐賀大学では、すべての実習に教員と技術職員全員が対応する体制となっており、最初は少々戸惑った覚えがあります。この方式では、教員は自分の専門分野以外の実習内容についても、学生を指導できるレベル以上の習熟を必要としますので、結果として、より一層の多面的な知識と技術を身に着けることにな

ります。私の場合は、幼少のころから種々の動物の世話や田畑では親の手伝いをしてきたため、ほとんどの農業分野における初歩的な知識と技術を持っていましたので、特段の違和感もなくこのような実習教育に入れたようです。また、学生にとっては、すべての実習において、同じ教員と技術職員から指導を受けるため、質問なども行いやすくなり、実習内容の習熟度が上がりやすいため、この実習方式は教員と学生の双方にとってメリットがあるように思えます。そして、雨天のため、急きょ変更をせざるを得なかった実習内容で苦勞したことや、アンケートで牛体洗浄が評価されてうれしかったことや、色々なことが思い出として残っています。

私の学問的な専門分野は畜産学の中の家畜飼養管理学と家畜生体機構学です。家畜飼養管理学は家畜を飼育すること、家畜生体機構学は家畜をと殺・解剖してその組織や器官を調べることで、この内容に沿った講義や研究を行ってきました。私の研究室に配属になった学生諸氏の卒業論文、修士論文、そして博士論文作成のための研究タイトルも私の専門分野に関係するものでした。資源の効率的な循環が世の強い要望となってきたので、家畜の飼料もこの方向性で検討する必要があったことから、佐賀県で特徴的なくず米、茶がら、ホテイアオイ、オカラ、そして長崎県の規格外バレイショなど地域的な観点も加味しながら未利用資源の飼料化についての研究を進めてきました。家畜福祉の向上という観点で、ウシやブタの行動観察も数多く行いました。また、現在害獣として問題になっているイノシシの生物としての基礎的な情報を得るために、果樹園で捕獲したイノシシを解剖して、筋肉や内臓などをブタと比較したりもしました。このような研究を学生の皆さんと一緒にやった情景は今でも楽しい思い出として、頭に浮かんできます。

センターの管理運営は、基本的には教職員スタッフの業務ですが、私の方針として、できるだけ学生さんたちも加わるように要請してきました。それには、春の入学生オリエンテーションと秋の収穫感謝祭での100人以上の出席者に対する会場設営と昼食の準備、草払い機などを用いた定期的なセンター内の美化活動や棚田での有機米栽培のための苗床づくりから収穫までの諸々の活動への全員参加、また毎朝のミーティングへの学生代表者の参加などが挙げられます。さらには、卒業論文作成のための実験では、学生全員あるいは学生間での協力体制による実

施を奨励してきました。その目的は、一つには、センターは、教員、技術職員、事務職員そして学生と、それぞれ異なる立場の構成員の集合体であり、組織がスムーズに運営されるためには、それぞれの立場からの役割を担う必要があることを体験的に理解してもらうことでした。二つ目として、自分の専門分野だけではなく、できるだけ多くの農業（農学）全般に関する知識と技術を在学中に習得することを通して、社会に出てから直面するであろう種々の困難な問題や課題に柔軟そして適切に対応する能力の獲得を促すことでした。しかし一方では、この方式は束縛を好まない、あるいは団体活動の不得意な人にとってはきつかったかも知れません。

以上のような、教育と組織運営に関する基本方針の下、附属農場は、平成15年には田中欽二先生が推し進めてきた有機農業の推進、長年にわたって故山口清二先生ら農学部の先生方の努力で収集された柑橘類の遺伝資源の活用、そして地域貢献の推進をベースとした教育と研究を展開することを目的として資源循環フィールド科学教育研究センターへと組織名を変更しました。また、平成24年には海浜台地生物研究センターと統合することによって、現在のアグリ創生教育研究センターが設置されるという変遷を経験してきました。

アグリ創生教育研究センターの設置目的は、学内の他学部や学外の研究機関等とより一層連携して、現在の社会が解決を求めている課題を中心としたプロジェクト研究を展開し、その成果等を通して、これまで両センターが担当してきた農業に関する実践的な教育研究や地域へ貢献度のさらなる充実を図り、近隣の諸国との連携・協力活動を推し進めるものです。さらには、これまで生産を主目的に利用してきた家畜や農用植物などの農業フィールド資源を医療分野で利活用するなどの新しい教育研究分野の創生も目指します。

このような使命・役割が期待される本センターは、平成26年4月からは有馬進新センター長の下、若い先生と技術職員を新たに迎え、より一層の学際的・国際的な教育研究の推進・展開を目指していくことになると思います。したがって、同窓会会員の皆様にはこれまで以上のセンターに対するご教示とご協力をお願いする次第です。

最後に、同窓会会員皆様の今後のますますのご健勝、ご活躍そしてご発展を祈念します。

佐賀大学学位授与式、農学部同窓会長賞授与

平成26年3月24日、佐賀大学学位授与式が佐賀市文化会館で行われました。学部卒業生は1,352人（農学部156人）、大学院修士課程修了生343人（農学研究科49人）でした。

その後、農学部主催による「卒業祝賀会」がホテ

ルニューオータニ佐賀で開催され、この中で里本裕規（農学研究科）・城間祥大（農学研究科）・下村彩（農学研究科）の3名に農学部同窓会長賞（賞状と副賞）が金丸安隆会長から授与されました。

同窓会長賞の受賞者による寄稿は次のとおりです。

■ ■ 農学部同窓会長賞 受賞者の手記 ■ ■



農学研究科 生物資源科学専攻

里本 裕規

農学部同窓会長賞という過分な表彰をしていただき、恐縮していると同時に、大変ありがたく思っています。

私の修士論文テーマは、「単一圃場におけるカブモザイクウイルスの遺伝学的解析と時間的変動に関する研究」です。私の研究室では主に世界の農作物に甚大な被害をあたえている植物ウイルスであるカブモザイクウイルスのゲノム塩基配列を解読後、様々なソフトウェアを駆使し、分子進化的な解析を行うことで、ウイルスの進化の軌跡や発生状況などを調査しています。その中でも特に私は、佐賀県小城市の単一圃場から継続的に分離株を採集し、圃場におけるウイルス集団の変動やウイルスが進化する速度（塩基置換速度）について研究を行いました。研究の結果、単一圃場内の1999-2002年ウイルス集団と2007-2012年ウイルス集団の構成や種類が大き

く異なっており、ウイルス集団が比較的短期間で変動するということが、また単一圃場のダイコンのみから継続的にウイルス分離株を採集した場合と、世界規模の多様な植物体からウイルス分離株を採集した場合のウイルス進化速度が同様の値を示すことを明らかにしました。つまりこれまで植物ウイルスの研究では行われていなかった圃場レベルでの進化速度推定の有効性を明らかにしました。その研究結果が認められ、平成25年度日本植物病理学会大会では学生優秀発表賞を受賞することができました。研究の機会を与えてくださった大島先生や草場先生をはじめ、研究室の先輩、友人、後輩、そして学業を続けさせてくれた両親に大変感謝しております。

私は平成26年度から佐賀県武雄市役所に入庁し、市職員として働かせて頂くことが決まっております。行政という今までの研究とは全く異なる世界に入ることになりますが、大学生活で得た、粘り強さと感謝の心を持って、市民のために、市民に寄り添いながら働ける市職員を目指し、精進していきたいと思っております。



農学研究科 生物資源科学専攻

城間 祥大

この度は、農学部同窓会長賞という光栄な賞を頂き、誠にありがとうございます。

私は学部2年から修士2年まで、「ミトコンドリア分解に着目した新たな発酵技術の開発」というテーマのもと研究を続けてきました。アルコール飲

料の製造において、吟醸酒のような高度精白米を使う日本酒や少ない麦芽を使う発泡酒の醸造条件では、多くの場合酵母にとって栄養分が不足しています。このような低栄養の状態で発酵を行うとエタノールの生産効率が悪くなったり、オフフレーバーが発生したりすることが問題になっています。この技術課題に対処するため、これまで低栄養時の発酵におけるアミノ酸の取り込みなどの研究が行われてきましたが、その技術課題はまだ完全には克服されていませんでした。また、低栄養のアルコール発酵時に酵

母の中でどんなイベントが起きているのかもこれまでほとんどわかっていませんでした。一方、酵母が栄養不足の場合には自身の細胞組織を分解するオートファジーが起きることが報告されており、また私が所属する北垣研究室ではアルコール発酵において酵母ミトコンドリアが役割を持つことを明らかにしてきました。これらのことから、低栄養条件でミトコンドリアのオートファジー（ミトファジー）が起きることは十分に考えられますが、これまでアルコール発酵におけるミトファジーの報告はありませんでした。そこで、私はミトファジーの解析を行い、これを制御することで技術課題が克服できないか検討しました。その結果、アルコール発酵においてミトファジーが起きていることを初めて明らかにすることができました。また低栄養の発酵条件では酵母はミトファジーによりミトコンドリアを分解し、栄養成分を得て自分の細胞の構築に回していることをつきとめ、この過程を阻害することでエタノール発

酵力を増加できることも明らかにしました。この過程はアルコール発酵における新たなプロセスであることから、発酵微生物の育種・発酵制御の新たなターゲットになると期待されます。

本研究が米国微生物学会誌に掲載されたこと、新聞に取り上げて頂いたこと、学会トピックス賞を受賞したこと、そして同窓会長賞を受賞できたことは、私一人の力による成果ではありません。丁寧に、熱心に、辛抱強くご指導頂いた北垣先生をはじめ、喜びも悲しみも共に分かち合った研究室の仲間、そして遠い沖縄から温かく見守り続けてくれた両親がいてくれたからです。この場をお借りし、改めて感謝申し上げます。本当に、ありがとうございました。

私は4月から菓子メーカーで研究開発職として就職します。佐賀大学で学んだことを発揮し、会社内だけでなく社会で活躍できる人材になれるよう精進致します。



農学研究科 生物資源科学専攻

下 村 彩

作物生態生理学研究室の下村と申します。この度は農学部同窓会長賞という名誉ある賞を頂き、誠にありがとうございます。

マメ科植物は根粒菌と共生することで根に根粒を形成します。根粒は固定した窒素を植物へ供給し、代わりに植物は光合成産物を根粒へ供給することが知られています。私はマメ科植物の根に光が照射されることで、この根粒形成が抑制されるという現象に着目して研究を行っております。根粒形成が抑制される原因となる光受容体の追究や、光を照射した時の植物の根と根粒菌についての応答などを調査することにより、光照射による根粒形成抑制のメカニズムの解明を目指しています。そしてこれらの研究により、根粒形成の抑制は青色光を植物の根や根粒菌が感知することにより引き起こされることを明ら

かにしました。その研究結果が認められ、「植物微生物研究会」では学生発表優秀賞を、「International Congress on Nitrogen Fixation」においてはYoung Scientist Awardを受賞することが出来ました。

3年と半年の研究生活はすべてが望むような結果ばかりではなく辛いこともたくさんありましたが、振り返ってみるととても充実し、大きく成長することができたと感じております。これもすべて、厳しくかつ丁寧に指導くださった指導教官の鈴木章弘教授、有馬進教授をはじめ、ともに励ましあった研究室の仲間、そして支えてくれた両親のおかげだと思っています。本当にありがとうございます。

私はこれから博士課程に進学し、主指導教官である鈴木教授のもとで「光照射による根粒形成への影響」のさらなる解明を目指し、研究を行っていきます。まだまだ未熟なところが目立ちますが佐賀大学配属の一学生として名に恥じないよう精いっぱい努力いたしますのでこれからもどうぞよろしくお願いたします。この度は本当にありがとうございました。

支部だより

農学部同窓会は本部の他に佐賀県内の佐賀県庁支部、佐賀県教職員支部、佐賀県農協連支部、農業自営者の会支部・佐賀県支部があり、これらに加えて神埼地区、鳥栖・三養基地区で新たな同窓生の組織化が進んでいます。

熊本には熊本県支部があり、全国各地では他学部と合同の次の同窓会組織が活動しています。これらの年次総会などへは農学部同窓会からも会長・副会長が出向いていますので、ぜひご参加ください。

全学同窓会支部とその事務局は下記のとおりです。

福岡地区支部（福岡市）
大分支部（大分市）
鹿児島支部（鹿児島市）

佐世保支部（佐世保市）
山口支部（山口市）
沖縄支部（那覇市）

諫早支部（諫早市）
東海支部（名古屋市）



植物病理学教室新年会
2014年1月



応用動物学研究室関係新年会
2014年1月4日



第5回佐賀大学農学部
熱帯作物学教室同窓会
2014年3月8日

佐賀県庁支部

平成25年度「先輩を送る会」を開催

佐賀県庁支部では、平成26年3月12日、グランデはがくれにおきまして、平成25年度「先輩を送る会」を開催し、山口誠治氏（県土づくり本部入札・検査センター、昭和52年卒・農業土木学科）の卒業をお祝いしました。

当日は、38名の現役会員（全会員224名）が出席しました。山口先輩からは、ご自身の仕事に対する思いやこれからのことが紹介されるとともに、私たち後輩をおもんばかる言葉などをいただきました。

会は決して大人数ではありませんでしたが、先輩と特に関わりの深い方々が多く駆けつけていただいたことや、気さくな先輩らしく、先輩ご自身が参加者のテーブルを回られたことなどもあって、あちこちで先輩との昔話に花が咲き、賑やかなものとなりました。

また、会半ばでは、参加者全員で肩を組み、学生歌を斉唱するなどし、参加者全員があらためて佐大

生であったことの思いを強くしたように感じました。卒業された山口先輩には、第二の人生を精一杯楽しんでほしいと願っています。そして、残った我々は、佐賀県勢発展のため、引き続き、力を尽くしていきたいと思います。

佐賀県庁支部 森 隆幸（H3年卒・果樹）



雲南省の旅

平成24年6月16日から24日まで、野中源一郎（佐賀市、ウサイエン製薬）氏、陳可可（中国科学院昆明植物研究所）氏の案内で、中国雲南省北西部への旅に出かけた。福岡空港から上海へ、そこから昆明に行き、同研究所のマイクロバスで通常の観光旅行では訪れることができないと思われる秘境の地域を訪れた。

しかし、雲南省は日本とほぼ同じ面積、人口は約4500万人、その1/3は25の少数民族が占める。秘境

とはいえども、沢山の人を何処でも見かけた。

行程の概略は昆明～大理～麗江～香格里拉（シャングリラ）～徳欽を拠点として、標高2500～4000mの地域を6日間で訪れ、その走行距離は佐賀～東京間の2.5回ほどにも達した。参加者11名の中には「高山病」と現地特有の料理に悩まされた方もいた。

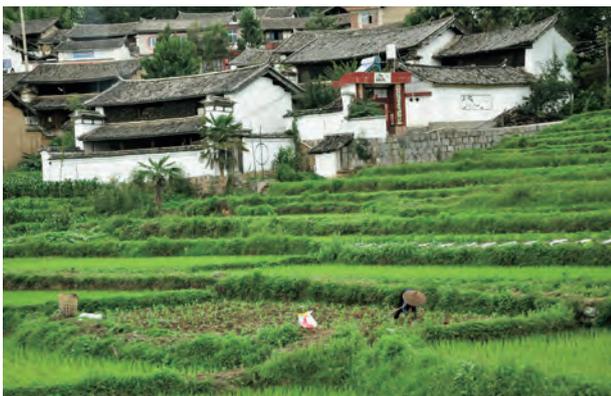
今回は紙面の都合で、その一部を写真で紹介したい。
村岡 実（S46年卒・植物保護）



青いケシ（香格里拉）



アツモリソウ（麗江）



集落と棚田（大理）



通学時の子ども（麗江）



通路での行商



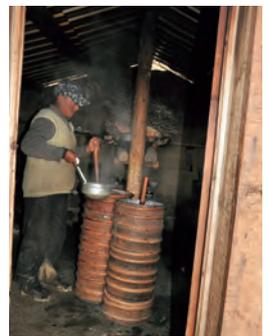
プーアル茶（普洱茶）専門店



揚子江上流の蛇行



夕方にヤクを自宅へ連れ戻す
（香格里拉）



ヤク乳からのバター製造
（徳欽からの帰路）



山頂まで開墾された畑

佐賀大学開学40周年記念の置時計について

S37年卒・農経 坂本 隆 昭

昭和24年6月に佐賀大学が開学し、平成元年が開学40周年でした。これまで節目の年に同窓会主催の記念行事が実施されており、40周年は農学部同窓会が当番で実施されました。

平成元年6月3日(土)に「はがくれ荘(現名称、グランデはがくれ)」において「開学40周年記念式典」やジャズダンスのアトラクションなど盛大に行事が執り行われました。

また、開学40周年に当たり、後世に記念になる品を残すこととなり、置時計が大学へ寄贈されました。

現在、置時計は本庄キャンパスの佐賀大学附属図書館に置かれ、時を刻んでおります。皆様も一度ご覧になって下さい。



農学部同窓会からのお願い

昭和24年に佐賀大学が創設され、文理学部に農学課程(作物、園芸、作物保護、畜産)が設置されました。以後、今日まで学科・附属施設の増設・統廃合が為されてきました。

他方、農学部同窓会は昭和39年に発足しましたが、昭和35年には会誌、名簿合本第1号が発行されています。以後、会誌と名簿が各年毎に発行されてきましたが、諸般の理由により会誌は平成19年の第20号を最後に中止されました。

現在は会報「ありあけ」が平成19年12月から年2回発行され、今回で14号となります。また、会員名簿は3年ごとの同窓生の動向状況調査票を基に「原簿更新」のみが継続されていて、配付は為されていません。

発足当時からの「会誌」、「会報」は農学部同窓会の足跡をたどることができる貴重な資料です。しかし、同窓会組織の再編、事務所の移動などもあって、創刊号(昭和35年)から最後の第20号(平成19年)のうち、1～8号、16～17号が事務局に所蔵されていません。

これらの会誌の所在をご存じの方、また所蔵されている方で寄贈していただける方、複製製本の為に一時的借用させて頂ける方などからのご連絡をお願いいたします。

連絡先 佐賀大学農学部同窓会 事務局

電話 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700

メール dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp

編集後記

佐賀大学の界限でも市街化が進みましたが、郊外にはまだ水田が広がっており、今は麦秋から田植えの時期へと変わりました。

同窓生諸氏におかれましては、日々ご健勝のことと存じます。

今回は本部役員改選の中間年に当たり、会長、副会長、編集長、理事の一部が刷新されました(本文3頁)。

また、全学同窓会の会長には前会長の金丸安隆(S43年卒・畜産)が農学部出身としては最初の就任となります。

今回の会報「ありあけ」14号にはこの3月で退職された野瀬昭博先生、尾野喜孝先生はじめ同窓生諸氏か

ら玉稿を賜りました。お礼申し上げます。

現在、農学部卒業生は7,191名に達します。会報は卒業生全員をつなぐ絆としての任務を念頭に、第7号～14号までの編集・発行を心がけてきましたが、会費納入の減少などのために、現在は会費納入同窓生のみへ配付されています。

次回からは、新たな編集長を初めとする会報担当理事の下で、大いなる飛躍と同窓生諸氏の益々のご健勝を祈念いたします。これまでのご協力、ありがとうございました。

(S46年卒・植物保護・村岡 実)